

第3回 和本の楽しみ 平安時代の物語

はしぐち 橋口
こうのすけ 侯之介



平安時代は日本人の書物観をつくりあげた重要な時期。それまでは中国の考えがそのまま入っていたが、自分たちの本づくりを工夫した。千年もつ紙も作られるようになった。そこにあるのは、本を伝えるという強い意識である。

中国の書物の影響

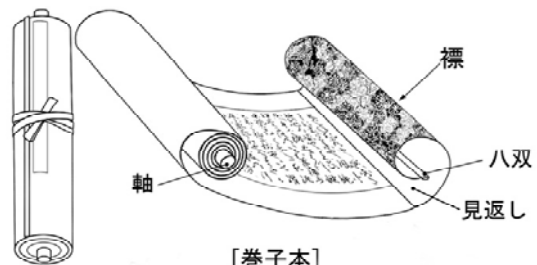
中国は 2500 年以上の歴史がある。漢字が考え出され、竹や木片に文字を書いてつなげる竹簡が多くつくられ、現在でも考古学の発掘で大量に見つかっている。後漢（紀元 1,2 世紀の時代には、文字を書いて保存できる質をもった紙が製造されるようになり紙装の書物が普及した。竹簡の時代から紙になっても、巻いて保存してきた。それを巻物、^{まきもの}卷子本^{かんすいほん}という。それが日本に伝わったのは早くても 6 世紀。日本人が自ら筆をとって本を書きはじめたのは 7 世紀。8 世紀の奈良時代になると、膨大な写経が行われるなど、仏教書の制作が盛んになった。『日本書紀』が編まれるのもこのときである。

卷子本が主流の時代

平安時代は、経典だけでなく和歌集、歴史書、日記や記録などさまざまな書物が作られるようになる。その大半は、卷子に仕立てた。

その制作にかかわったのが、^{きょうし}経師と呼ばれた職人である。この職業は江戸時代まで続き、今でも表装（襖や掛軸を仕立ててる）を業とする人たちに引き継がれている。

^{くぎょう}公卿（高位の公家）は、子孫のために自分の仕事や出来事、しきたりなどを克明に記録した。そのために用意されたのが今でいう「日記帳」で、朝廷の暦をつくる役人がつくって配布していた（具注暦ぐちゅうれきという）。それも経師が作成する卷子本だった。



漢文とは

中国は当時、「国際国家」だった。国内の方言の差も大きいし、異民族とは会話では通じない。そこで漢文は、どのように声を出して読むかにかかわらず、漢字で文章表現した。複雑な語尾変化もないし、文字が理解できれば、それでコミュニケーションができた。日本人も読み書きで当時の中国文化圏と相互の交流をしたわけである。

漢文とともに書物が中国から伝わったので、その装訂や紙なども多くの影響を受けた。平安時代の知識人（公家と僧侶）は漢文で書き、それを巻物にした。それが暗黙の規範だった。そもそも仏典も漢文である。だから経典も漢文で、しかも巻物だった。

カタカナ、訓点

とはいっても漢文は「外国語」。その知識を得るのは大変である。そのために博士の制度が奈良時代からできた。漢文や中国史を教える文章（もんじょう）博士、論語などの儒教経典を教える明経（みょうぎょう）博士などが大学寮に置かれ、貴族の子弟はそこで学んだ。僧侶は寺院の教育機関で師匠から教わる。その訓練のために、漢字に添えられる音を表すカタカナが考案され、テニヲハといった助詞などの入り方、句読点、語順（主語、述語、目的語）を示す記号がつくられた。これが訓点の起源である。

最初に書かれるテキスト、あるいは中国から輸入された書物は漢字ばかりの原典である。それにカナや点を読者の側が書き入れて読んだ。しかも、その書き入れはさらに次の読者に引き継がれる。この漢文を読むための補助的な記号ができたおかげで、事実上の翻訳ができたことになる。この書き入れが次世代まで引き継がれ、**書物は成長し続ける**

日本語を維持しつつ漢文を読解した歴史的価値は高く、知識の導入、コミュニケーションの活発化に役立った。

平仮名で文学表現という「発明」

『万葉集』は漢字の音を用いた万葉仮名で表記されたが、平安時代になって 100 年ほどたった 10 世紀の初め頃、今の用法に近い「仮名」ができた。表意文字である漢字と表音文字である仮名を使うことで、日本語の表現が容易になった。そこから平仮名と片仮名が分かれ、片仮名は漢文を読むための補助的役割をはたし、和歌が平仮名を採用した。

そのときにまとめられた勅撰の和歌集が『古今和歌集』である。「漢文であること」から解放されたが、それでもつくりは巻物だった。

しかし、和歌だけでなく、文章の叙述に仮名を用いるアイデアは確実に新たな展開となった。それが西暦 1000 年頃の『源氏物語』を生んだのである。

物語とは、「もの」を語ること。「もの」とは、人間界の嫉妬、恨み、恐怖などが人知の及ばない物の怪など悪霊がいて、それが人に祟る考えられていた。それを**人に語る**ことで怨霊を鎮めることができるとされた。それが物語の本来の姿である。

始めは文字通り、人の口から発せられていったが、文章で人に伝えるようになる。「もの」の具体相を語るには漢文では無理で、仮名を使って叙述する。それが物語文学を発生させた。漢文は公式の文ではあるが、日本人の日常や感情を表現するのは難しかったからだ。それで口語体が可能な平仮名が用いられるようになった。当時は音読をしていたと想像される。

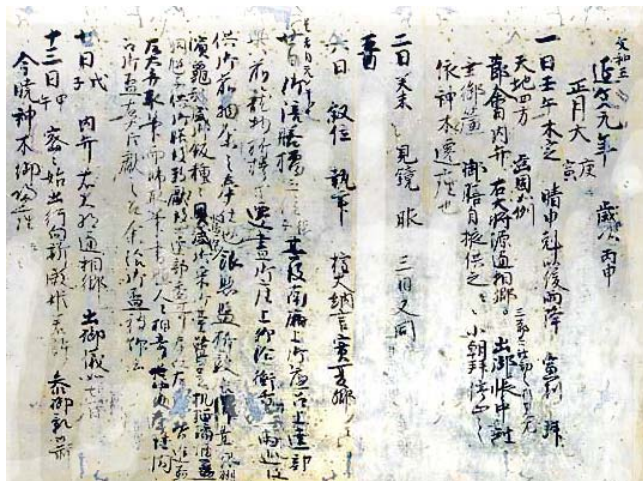
なぜ、女性が物語を書いたのか

漢文のの制約を受けない女性だからできることで、平仮名を用いて和歌をはじめ日記や随筆、物語を書いた。

それは男手＝漢文(真名)一卷子本という従来の**規範**から脱却することだった。もともと、女手一仮名文は存在していたが、書物としての形態は中途半端だった。和歌集は仮名で書かれていたが、卷子本に仕立てられていたし、西暦930年代の紀貫之の『土佐日記』も男性だが、「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり」と、あえて女性に仮託して平仮名で書いたが、本の仕立は卷子だった。どうしても巻物にする観念から離れられないでいた。

それをあえて冊子にしたのは、清少納言の『枕草子』あたりが始めだろうが。それを大々的につくったのが紫式部なのである。『源氏物語』を冊子にしてお仕えしている中宮様に差し上げたのである。「規範」という制約がないので、自由にもものづくりができた。

同じ日記でも『源氏物語』と同時代に書かれた藤原道長の『御堂関白記』→や藤原実資の『小右記』などは、たんたんと日々の出来事や儀式の次第などの事実を漢文体で書くだけで心情の吐露はほとんどない。それもあって歴史学の分野では第一級の史料として扱われる。『土佐日記』は文学的であるが、逆に歴史の史料としては使いづらい。



冊子の装訂

その『紫式部日記』に次のようなくだりがある。

おまへ(御前)には、御さうし(草紙=冊子)づくりいとなませ給ふとて、あけたてば、まづ向ひさぶら(侍)ひて、色々のかみ(紙)えりととのへて(選り整へて)、ものがたり(物語)のほん(本)どもそへつゝ、ところどころにふみ(文)かきくばる。かつはとぢ(綴)あつめしたゝむるをやく(役)にて、あかしくら(暮)す(右図の『紫式部日記傍注』より)

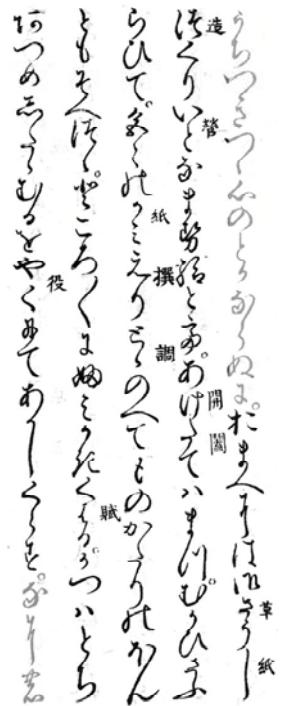
お仕えしている中宮様が草子を作りたいとおおせなので、朝早くから伺候して、各種の色々な染紙を選び用意して、源氏物語の草稿(本)を添えて、ほうぼうの能書家手紙を添えて清書を依頼した。集まったところでそれらを綴じ集めて仕立てる仕事で暮らした(橋口意識)。

何人かの能書家に清書を依頼して、それを集めて冊子に製本したというのである。卷子は経師に依頼して製作されるが、冊子なら個人で作ることができた。

冊子を「さうし」と読んだ。卷子の反対語である。本物の書籍とは扱われないので草子とも書いた。草紙、双紙とも書くが意味は同じである。漢文ではないので巻物に仕立てる必要はないので、そこから自由な発想が生まれた。

日本の伝統的書物(つまり和本)は、しっかりした内容の(いわゆる堅い本)を〈本〉といい、大衆的でとるにたらないと考えられていた読み物の類を〈草〉と違って区別してきた。

江戸時代には、それをつくる本屋の格の違いもはっきりしていた。その〈草〉の側の本を〈草紙〉といった。その起源は、西暦1000年すなわち『源氏物語』が生まれたときのことである。



粘葉装(でっちょうそう)

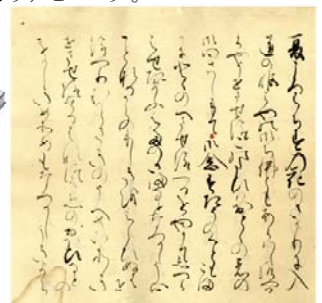
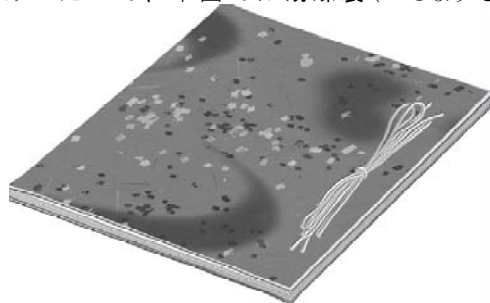
同じ頃(11世紀初頭)の書物で現存するのは宮内庁が持っている『和漢朗詠集』で一枚一枚に書かれた紙をノドのところを糊づけして冊子にする方法である。

残存する最古のものとしては、9世紀初頭、空海が書いた『三帖十帖冊子』。中国で修行中に密教の秘籍を写経生などに書き写させたもので、それを卷子装にせず冊子にしたのである。正式な経典でなく勉学のための筆記のようなものなので、卷子にする必要がなかったのだ。粘が糊のことで、葉は一枚の書かれた紙であるところから名付けられた。

中国でもこの頃、冊子への方向転換が図られ、宋代の出版物(宋版)はこちらが主流になる。紙の表面だけに印刷し、裏は白い。その紙を谷折りにして折れ目に近いところに糊をつけて冊子にしていく。本をめくった様相が、蝶の舞うようであったので、中国では胡蝶装(こちょうそう)という。

結び綴じ

『紫式部日記』に「とちあつめ」とあるのは「綴じ集め」ということである。綴じるのは糸などで縫うことをいい、糊で貼っていくのと微妙に違う。『枕草子』に「薄様の草子。村濃のいとしてをかしく



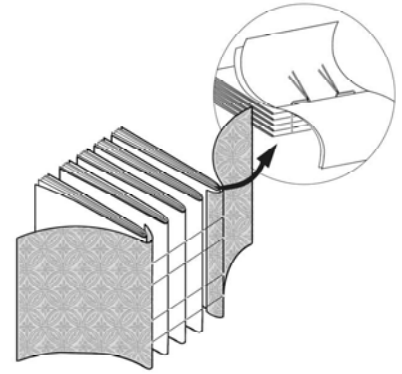
とちたる」という一節がある。「薄い紙に書いた草子の村濃の糸(濃い色と薄い色で染めた糸)で優美に綴じたもの」ということで、糸を使って綴じている。書かれた紙を丁寧に折り重ねて、そのノドのところをきれいな糸で綴じる方法で、後に「大和綴じ」といわれる方法である。これは技術的に容易なので個人でもできる製本方法である。表紙や糸にセンスのよい選択を

すれば、美しい本ができあがる。『紫式部日記』に出てくる草子はこの方法ではないかと私は想像している。

さまざまな装訂が試された時代

折本（おりほん）

僧侶が日常使う経文を読むには卷子本は扱いにくい。目的とする文節にたどり着くの大変だし、読み終わって元に戻すのはもっと容易ではない。そこで工夫されたのが、卷子と同じように長く糊でつないでいくところまでは同じだが、均等に折りたたむ方式が工夫された。今でも僧侶が読経に使う本はこの形である。



列帖装（れつじょうそう →右図）

糸をきちんと使って製本する方法は、平安時代の末期から鎌倉時代にかけて考案された。複雑だが仕上がりが美しく、江戸時代にいたるまで高貴な女性のための書物はこの装訂だった。ただ、これは素人にはできないので、専門の職人が担った。

千年生きる美しい紙の製作

紙屋紙

平安時代、朝廷の中に紙を生産する紙屋院が置かれた。当時の最高級紙をつくった。これを「紙屋紙（かみやがみ、かんやがみ）」といった。材料は奈良時代からあったコウゾ（楮）と雁皮（がんび）で、前者は「まゆみ紙」などとといて貴族の男性の懐紙（かいし、常にそばに置いて思いつけばそこに歌を書いていく）や書籍用紙となった。雁皮を材料にした紙は、「斐紙（ひし）」といて、光沢があつてきめが細かく、なめらかな紙である。書きやすく、また虫害を受けにくい特長があつた。厚手のものを厚様（あつよう）といい、両面に濃い墨で文字を書いても裏写りがしなかつた。薄いのを薄様といい、さまざまな色に染められて女性たちの懐紙となった。

染紙

写経は白紙に書いてはいけないので、キハダや藍で染めた紙に書いた。平安貴族や女性たちは衣服でもお気に入りの色のバリエーションを楽しんだように、薄様を染めて色の組み合わせを楽しんだ（かさねという）。『紫式部日記』に「色々のかみ（紙）えりととのへて」とあるのがこれが染め紙である。これを能書家に渡して書いてもらったのだ。これらの紙は丈夫で、保存がよければいつまでも残ることがすでに実証済み。

源氏物語が今も読み継がれるのは？

平安時代には、もっと多くの物語があつただろう。しかし、大半の物語は今と同じように短い間に消えてしまった。また、正しく写しているとは限らない。とくに物語の場合、写す者が意図的に改変してしまうことも多々あつた。そこで重要なのは、すぐれた文学観にもとづいた取捨選択と、正確なテキストの保存である。鎌倉時代のはじめの公家・藤原定家（1162-1241）がそれを行った。各種の物語・和歌集の注釈と正確な伝本の整理をおこない、善本（証本しょうほんという）を残そうとしたのである。この定家の自筆本は残っていないが、次の時代には多くの人々がそれを書写してきた。今日、『源氏物語』をはじめ1000年前の物語が読めるのは、この間に多くの人々が本を伝える努力をしたからである。

参考文献：『和本への招待—日本人と書物の歴史』、橋口侯之介、

講義の要旨はpdfにするので、各自がダウンロードすること。

http://www.book-seishindo.jp/seikei_tanq/